
断片小説

黒漆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

断片小説

【Nコード】

N1144G

【作者名】

黒漆

【あらすじ】

幾つかの短編集。日常、不日常、色々取り合わせて詰め合わせに。感動系の短編を纏めております。ホラー要素は含まれません。お気軽に読んでいただければ幸いです。

トレイン・ゴースト(前書き)

受験生って大変ですね。

トレイン・ゴースト

僕は疲れていた。

偏差値と成績、学校と進学塾。

カリキュラムと学力テスト。

毎日が灰色で成績が上がる事しか興味を示さない父さん母さん。

これまでの僕は親に認められたい一心で勉強を頑張ってこれたけれど、それももう限界だった。本当は塾へ行かなければいけなかったけど、僕は初めてさぼった。

この先僕自身が何をしたいのか解らないのに勉強ができる、偏差値が上がる、それって本当に必要な事なのかな。僕にはわからなくなった。

こうして電車の線路の上に作られた陸橋にたつて電車を眺めていたら、僕は全てが唐突にどうでもよくなってしまうた。季節は十二月、冷たい風が僕の頬を静かに叩いていた。

なにもする気が起きなかった、陸橋の向うの線路の上を行き交う電車を手摺に手をかけ眺めていた。電車で揺られて流されてゆく人々たちを、あの人たちは何が目的で生きているんだろうな、なんて思っただけだ。ただ見ていたんだ。何度か行き交う電車が通り過ぎた時だった。手摺の向こう、電車のパンタグラフが頭上に張られた鉄線に触れて電気が飛び散り、ぱつと目の前がまばゆく輝いた。反射的に瞼を閉じてしまつて、次の瞬間目を開くと手前に透き通った透明な女

の子が浮んでいた。

僕より少し年上風で暖かそうなコートを着ていて、毛糸の手袋をつけていた。

彼女は強気な眼差しで僕を射て、両手を前に突き出して必死に僕を止めようとしている、そんな風に見えたんだ。

電車が通り過ぎると彼女も忽然と消えていた。

僕は気がついたらそのままの格好で立ちすくんでいて、通りかかる人達に訝しげな目で見られていた。

一息、白い息を吐く。

明日また同じ時間、もし彼女を見ることのできるのなら幽霊でも構わない、もう一度会いたい。そう思った。

次の日僕は当然のように塾をさぼり、同じ場所で何本も行き来する電車を見つめながら過ごした。

昨日と同じ場所なら電車が通り抜けるたび彼女に会えるんじゃないか、そう思っていたけれど結局彼女が現れることは無かった。

やっぱり、錯覚だったのかと諦めかけたその時、時計が23:05分を指し、電車が向うに見えたその瞬間、昨日の彼女がもう一度現れた。

たった何秒と言う間だけだったけれど昨日とは違い彼女はなんだか優しそうに見えた。両手をポケットに入れて、僕を上から見下ろ

していた。

僅か二日さぼっただけなのだけれど、それによって僕は親から大目玉をくらい、三日目からは流石に僕も塾へと従順な振りをして通わなければならなかった。

けれど時間的には全てを終わらせてからでも、電車の時間に間に合わせる事が出来たので待ち続ける無駄を考えると、寧ろそれが丁度いいくらいだ。

あれから彼女の事が頭から離れない。

経験した事のない感覚で、これが一目惚れなのかと静かに僕は思ったのだった。あの日死のうと考えた事が嘘のように思えた。それから僕は毎日同じ時間、一瞬だけの出会いを求めてあの場所へと通いつづけた。死者との恋なんて少しかつこいいかななんて自惚れも、少しはあったのかもしれない。

十二月も終わりにさしかかる頃、僕は塾での勉強を終え。いつもの場所で彼女の出現を待つ。階段を息を切らして登りきり高架橋の上で一番電車が良く見える中心へと走る。するとその地点には生身の彼女が立っていた。

「こんばんは、会うのは初めて、になるのかな？私はいつもこの時間、君を見ていたけどね」

僕は驚いて言葉を失い、立ち尽くしてしまふ。まさか生きている人だったなんて。

「私もここで、昔ある人に助けられたんだ。今の君と全く同じ状況で」

彼女は空を見上げてほう、と一息。白い息が空中で霞んで消える。

「私も自分の才能に行き詰っていてさ、進路を決めかねてた。そんな時ふと、ここから飛び降りたらなんて考えて。そうしたらそこに突然男の人が現れたの。彼は私の事なんかちつとも気がつかない風で、いつも遠くを見つめてた。そんなある日気がついたの。彼は生きている人なんだって、彼がコーヒーを片手に持っていたから。そんな幽霊聴いた事ないでしょ？私は彼に会いたくて」

彼女はそう言い、腕を上げてそこから斜め上のマンションを指差した。

「あのマンションの一室のベランダからコーヒーを飲んでいる彼を見つけた。でも皮肉なものね、すぐに彼はその部屋から引越してしまったの。私はいつかまた彼に会えるんじゃないかって、彼に会って私を救ってくれてありがとうって言おう。その時まで頑張ろうって決めたんだ。彼は全く知らないんだけどね」

そう言って静かに笑う彼女。

「それからあそこに棲み始めて一年が経つ頃、私がベランダから外をたまたま見下ろしたら、君が私と同じ場所で深刻そうな顔をして立っているのが見えたの。原理は解らないけれど、あの部屋のベランダに立つと11：05分、電車が通る間だけそこに姿が浮かび上がるみたいなのよ。だから私は私がそうされたように君も救おうと思っただ。騙したみたいでごめんね」

「いいえ、感謝しなきゃならないのは僕の方ですから」

僕は自分の頬が赤くなるのを感じていた。

「けど、私も明日には引越すのよ。ここからじゃ私が通う学校は遠すぎるから。いままで親に我俣である部屋を借りてもらっていたけれど、それも限界みたい。だから最後に君に話しておきたいと思ったの」

僕はその言葉がショックだったけれど、不思議と悲しさは感じなかった。生身の人間が相手だと解ったからなのかも知れない。

「僕もこれから頑張れるでしょうか？」

「頑張れるよ、私も頑張れたもの。目標が出来れば頑張れる、そういう物だから、さ」

「あなたの名前、教えてもらえませんか？」

「それは秘密、ただ、学校の名前なら教えてあげるよ。だから、そこから先は君次第。なんて少し自意識過剰だね」

彼女は少し照れながらそんな言葉を僕に向かって言った。そして僕に学校の名前を教えると、いつかまた会えることを楽しみにしているよ、と僕と握手する。

「さよなら」

二人でそう言い合って、僕等は違う方向へと歩き出す。こうして僕の当面の目標は決まった。今はまだ本当に僕が求めているものが何かは解らないけれど、こういった進路の決め方でもいいじゃないか。

僕は空を見上げて力強く拳を握った。

モノクロームメロディ

私の家にはピアノが有ります。けれど、私はピアノが弾けません。かつては私も弾けたのだけれど、なぜは今は指が動かないのです。

母はピアニスト、父は作曲家でした。音楽家の私の一家、家にはいつもジャズやピアノの演奏が流れ、私に時間の流れを忘れさせてくれます。幼い頃から私は耳に自信がありました、音楽家に大切なのは音を聞き分けられる力なの、母はいつもそう、つひや呟いていました。

一日に何度か、私の家でピアノの演奏曲が流れます。ジュピター、月光、G線上のアリア。それらは私の好きな曲ばかり。私の母との思い出が詰まった陽だまりの日々の思い出を乗せてピアノの曲が紡つむがれます。

柔らかな日々、テーブルにトーストエッグとコーヒーを乗せ、指でリズムを奏でる母と、それを見つめて静かに笑う父。緩やかにトロイメライが流れ、私は玩具のピアノを引きずり、母のピアノ演奏をねだる。それが私の光の記憶です。

別れの時は突然訪れます、父が家を出て行ってしまいました。母はお父さんは私達を置いて遠いところへでかけてしまったの、とそう言っつて、その日以来ピアノに触れなくなってしまったのです。

ある日、心無い人に私は知らされました。あなたのお父さんは外に恋人ができたのだと。私は母を支えたかった。幼い私は母にねだりました、私にピアノを教えて、今度は私がお母さんのためにピアノを弾くよ、と。

それからは雨の日々が続きました。母は私に辛く当たる、鍵盤を弾き間違えると叩かれ、ペダルを踏み間違えると怒鳴られ、テンポを外すとつねられました。私はそれでも母の心が私に向いていくれる事が嬉しかった。あれほど優しくかった母が変わってしまったことは悲しかったけれど。それでも私が上手くピアノを弾けた時、その時だけは昔の母が戻った気がしました。私はその笑顔が欲しくて、いつも必死だったのです。

その日、母は久しぶりにお父さんに逢いましょう。私にそう言いました、私は父にはもう会いたくありませんでした。大好きだった母を変えてしまった父、けれどそんな父に会うことで母に笑顔が戻るなら、そう思い、私は母と共に車に乗って出かけました。

行く先は遠い場所でした。家から随分長い道のりを車で走り、窓から見る流れる景色は普段より色あせて見え、これからどうなるのだろう、私はそんな事を考えていたように思います。気がつけば辺りに海が見え始めました。母は海の見える下り坂のカーブで車を止めると、私に海は好き？と聞きました。私はお母さんが好きなら私も好き、そう答えます。母は崩れかけた優しい笑顔で私の頭をなでくれるのでした。

そして母は決心したように息を飲むと、足を踏み込みます。突然車が衝撃と共に動き出し、速度が上がリ、車は車道を反れ、ガードレールを突き破って空中を飛ぶと、私は母と共に海へと落ちて行きました。

その日以来、私の世界は暗闇に満ちています。

気がつけば私はどこかに寝かされていて、私の腕を握る誰かが私

に話しかけている事が伝わります。けれどその声はどこかとても遠い場所から話しかけられているようで、その人が誰なのか、性別がどちらなのかも私にはわかりません。あれから母がどうなってしまったのか、それすらも解らず、私はただ、呆然と日々を過ごしました。

目を開けても私の瞳は何も映してはくれず、輝きの無い世界。私の腕を握る手が、母なのかも考えた事もありました。けれどその手は母の手のような繊細さが欠けている様な気がして私は信用する事ができません。やがて、何日かの時間が過ぎた頃、私はその場所から手に連れられて、どこか別の場所へと連れられていかれます。

そこはどこか懐かしい匂いがして、やがて私の過ごしていた家なのだと、核心を持ちました。家についてからの日々、毎日何度か、私の家のピアノから私の好きな曲が流れました。ピアノの音は私の耳を裏切らず、あの日々のまま私に曲を伝えてくれます。しかし、以前のような色鮮やかな音の感動は今の私に感じられる事はありませんでした。

ピアノを弾くのは誰なのか、そう考えた時、母を思い出し、母が私のために演奏してくれているのだと、そう思っていました。

私が全て悪かった。妻を殺し、あの子の未来をも奪った。この家に私が帰った時大切なものを失ったのだとやっと気がついた。私はただ、騙されていたという事を知ったときには全ては遅すぎた。全てを失ってはいない、あの子が生きている。

声はあの子には届かない。あの子が意識を取り戻したとき私はとても喜んだ、償^{つく}える機会をくださった神に私は感謝した。しかし、

その先にあるのは別の絶望だったのだ。目を失い、耳も閉ざされて。医師の話だと、あの子の耳は正常なはずだった。だが、人の声が、言葉があの子には届かない。それでも私は絶望する訳にはいかないのだ。妻に誓った、自分に誓った。あの子の為に毎日、あの子の好きな曲を弾いた。あの子が曲に反応している、それを知って何日も何日も。私ができることならば、何もいとわない。私が失って悲しむ事ができる者はあの子しかもう、居ないのだ。

それから何日もの日が過ぎ去りました。四季は音が伝えてくれるのです。春風の協奏曲、雨音のボレロ、木枯らしのワルツ、無音のノクターン。それと共に私の耳に届くピアノの曲も日に日に増えてゆきました。聞いた事のない曲、懐かしい曲、優しい曲、悲しい曲。

いつしか私の指は架空の鍵盤の上を流れるようになりました。演奏される曲に合わせて指が勝手に動き始める。私の心が揺れている、その振動が伝わったように指が震えました。

その日以来、私は手に連れられてピアノの前に座らされます。指が鍵盤に触れ、ピアノが弾きたい、そう思うのだけれど私の指は動く事がありません。私の中で何かが逆らっているのだと、私はそう思いました。

ある日、私の耳にトロイメライが流れ込みました。私が大好きだった曲、輝いていた記憶が蘇り、私の心を叩きました。手に連れられてピアノの前に座った時、母がテーブルの上でリズムを刻んでいる姿が私の頭の中に浮びます。やがて、私の指が動き始めました。聞こえる音はかつての輝きを私の中に呼び戻して、光と共に私の記憶が開かれました。

空中に投げ出された車、目の前に広がる岩と海、ゆっくりと近づいて来る波の形が、しぶきが私の目に刻まれて。衝撃と共に消える映像、入り込む水が私の体を冷たくさせ、塩辛さが私を恐怖させた。母が一言、ごめんねと言った。私はもがいてシートベルトを外して、車の中から外へと浮かび上がる。母を置いて、必死だった、死にたくなかった。

気がついた時、あの手が私を支えていた。

「凄いい、凄いいよ。ピアノ弾けたじゃないか」

懐かしい、声が聞こえました。それは母ではなく、父の声。私はずっと気がついていました、弾いているのが母では無いと、母はピアニストだからあんなに下手な演奏はしません。けれど父が私の為に帰ってくるなんて有り得ないと思っていました。声が私の心に響く。熱い何かが頬を伝って流れ落ち、私は声を上げて言いました。

「私、お父さんの事を許します、だから、お母さんを見捨てた私の事も許して下さい」

粉挽きネイロ

麦穂が絨毯の様に広がる丘、陸の中腹に数多くの風車小屋が建てられている。そんな中、丘の奥、山際の小高い平地に一際大きな風車小屋が離れて佇んでいた。

風車小屋の中では老婆が一人、椅子に座り編み物をしている。隣には麻袋が置いてあり、中には小麦が沢山入れられていた。老婆は右手をだしなさいと言い、旅人に一握りの小麦を握らせて静かに語りだす。

粉挽きネイロの物語。

粉引きネイロは村でたった一人の粉挽き職人、村で育った大麦小麦、それら全てがネイロの風車に集められ、巨大な風車の元で粉へと変えられる。ネイロの父はネイロと同じ粉引きだった。代々継がれる粉挽き一族、それがネイロの一族なのだ。ネイロの父はネイロに言った、粉を引くのは人生を弾く事、苦しみ妬み、悲しみ嫉み。それらは麦と共に弾いて粉にしてしまえ。しかしそれでは良い粉は弾けない。喜び楽しみ、笑い愛おしむ心、それらも共に粉にして。麦が麦粉になり、パンになり、果ては人の血肉となる。それは人を支える仕事さ。わしらは大変な役をこなしているのだ、誇りを持つと。幼いネイロは毎日それを聞き、青年となり、大人となった。やがて父親は死に、ネイロが風車の主となった。

来る日も来る日も粉挽きネイロは粉を挽き続ける。ネイロの挽いた粉は肌理細やかで上質のパンが焼けた。村人達はいつの頃か、それが当たり前なのだと、粉挽きなど誰もが出来る物なのだとそう思うようになった。

粉挽きネイロは楽な仕事だと罵られ、いつでも変わってやるぞと馬鹿にされ、それでも苦言のひとつも上げずただ、只管に粉を挽き続けた。

何年もの月日が流れた、ある年村は凶作だった。村中の食料がぎりぎり、余る小麦も一粒も無い、そんな年のことだった。

ぼろを着た女が村に現れ、食料を分けてくれと村中を回る、しかし誰もが余裕無く、よそ者にくれる物など無い、一様にそう断られ、女は遂に村はずれの丘の上、ネイロの風車に辿り着く。

ネイロは小麦を貯めていた、村人からの報酬に粉挽き料で小麦を受け取り、長い年月貯め続け、蓄えた小麦は山のようにあった。ネイロは女に小麦を分けた。そして一粒の小麦を女の手に乗せて、これは願いの小麦だよ。本当に困った時に、この小麦に願うと良い、そう言つて麦藁で編んだ子袋に入れ、女に渡した。ネイロはそうして小麦を粉に変えて行く、女に気を使い父の話に聞かせ、自分がどう粉を弾くかを楽しそうに語った。

女が小麦粉の袋を背負い、パン工房へと降りてゆく、それを見た村人は自分達にも分けろと言つたネイロはならばと小麦を分けた私は粉しか挽けない男、あなた方が居なければ私の仕事は無くなってしまう、ですから小麦を分けましょう。そう言いネイロは小麦を分けた。

村人達は当然だと、当たり前だと小麦を奪う、そうして残った小麦は僅か、ネイロがやっと生き延びられるその程度しか残されなかつた。小屋に残った女とネイロ、女は恐れた。ネイロが自分に分け与えた小麦、それを返せと言われるのではと、女は小屋から小麦を

持つて、夜の間村から消えた。ネイ口に残された僅かな小麦、それすらも奪つてどこかへ消えた。

ネイ口はそれでも悲しまなかつた、小屋に残つた僅かな小麦をかき集め。一握りの山を何とか探し出す。それを粉へと挽き上げて、パンに焼いたら毎日少しずつ齧り、粉を挽き続けた。

村人はネイ口を蔑んだ、あいつは馬鹿だと罵つた。ネイ口が配つた小麦は戻らず、誰も助けはしなかつた。なぜならネイ口はねだらなかつた。粉を返せとは言わず、ただそれから粉を挽き続けていた。

女は人を信じなかつた。男は金と体しか求めず、無償での奉仕などありえない、そう思つていた。だからネイ口の粉を盗んだ、けれどネイ口は追いもせずただ只管に粉を挽いていた。

粉挽きネイ口は最後まで、粉挽きネイ口で居続けた。村人が気がついた時、ネイ口は死んでいた。風車の歯車がかみ合う音にうずもれて、安らかに眠るように死んでいた。

村人は皆、己を恥じた。女も自分の身勝手さを呪つた。粉挽きネイ口の巨大な風車、村人が変わりに使つても、誰も彼には敵わなかつた。挽けた小麦は荒い粉、細やかな粉には遠かつた。

それ以来、村人達は人が信用できなくなつたとき、自分が信用できなくなつた時に一握りの麦をここで挽き、それを手元の小さな袋に入れることで疑う心を粉にするのさ、あたしやその時裏切つた女さ。償わなけりや、それにここに居るとあたしは安心できるのさ、老婆は静かにそう締めくくる。

一瞬風が凧ぎ、風車が軋みゴトゴトと齒車音が激しくなる。そして、旅人は頭の外套を剥いだ、中からは懐かしい素顔が現れ、同時に麦と太陽の香りが鼻をすり抜けた。老婆がその顔を見て目を剥いた。小麦の白い粉が舞い上がり、老婆の首に吊り下げられた藁の袋が黄金に輝いていた、そんな中、旅人は言う。

長い間生きていれば、時には強い風も吹く、あなたも村の人も苦しんだ。もうあなたは許されている。そういつて旅人は麦を挽いた。挽かれた粉は肌理細やかな、上質な小麦粉だった。やがて旅人は笑みを浮かべながら、外套と共に空気に溶けるようにして消えた。外は穏やかな風が吹き、黄金色の麦穂が波を作って揺れていた。

シュチュエーションループ

いつもと変わらない通学、いつもと変わらない朝。あたしは通学、電車にゆられ学校へと向かっていた。そこには私の好きな彼が現れ、つり革につかまり電車の振動で揺られている。今日は会えた、そう思うと自然と顔が綻んだ。あたしはまだ、声をかけられずに今日もまた見つめる事しかできない。けれどその日、そんな日常に変化が起きた。

彼が隣で揺られていた女子に声をかけたんだ。なんだか、ぎこちない風に話しかけてその女に突っぱねられていた、そんな感じだ。彼はなんだかしょんぼりして落ち込んだ風だった。

あたしは言うなら今日、今しかない！そう決心して彼に近づいて話しかけた。

「あの」

「君さ、いつも俺のことじろじろ見てんだろ、気味悪いから止めてくれないか！」

その瞬間あたしの頭は真っ白、あーあ。最低だ、告白する前に振られるなんて。

肩をがっくり落とし、今日一日、何もやる気が起きないな、そう思っている。あたしの近くにクラスメイトの男子が寄ってきた。あいつは電車でいつもあたしを見ている奴だ。言いたい事があったら言えばいいのに。人の事は言えないけどさ。

「あのさ」

「あんだ、あたしの事いつもじろじろみないでくれない！」

あたしの口から反射的に出た言葉。でも、仕方ないよね。こんな状態だもの。

うなだれて吊り革に体を預けているクラスメイトの男子、なんだか少しあたしの良心が痛んだ。するとそこへさっきの女が話しかける。

「すみません」

「俺のことはほっといてくれ！」

って、あれ。おかしくない？この展開。

次の日、結局やはり毎日変わらずにやってきた。いつもより暗い通学電車。今日は彼の事を直視できなくて、家から適当に持ってきた文庫本を片手にずっと文字を見つめていた。そうしているとあたしが好きだった彼に声をかけられた。今更なに言われるのかなと少し怖かったんだけど。

「ごめん、昨日は言い過ぎた。折角だから、友達になってもらえな
いかな」

あたしはそれにはびっくりで、返す言葉がすぐに出なくて啞然と

してしまっただけだ。我に反ってすぐ頷いた。

となりにはクラスメイトの男子、なんだか複雑な顔をしてあたしを見ている。それじゃとあたしもこう言うんだ。

「あたしからもごめんを言わなきゃね。ごめん」

「それじゃ俺達三人はここから友達なんだよな」

クラスメイトの男子がそう言っつて、三人で笑い合つとそこに昨日の女子が現れて、

「あの、私も仲間に入れて下さい」

解っていたんだけどね、やっぱりこうなるよね。

こうしてあたし達四人は不思議な縁で友達になったんだ。結局あたしたちは四人とも同じ思いを抱えて、お互い一方通行の片思いを続けていた訳だ。この先どうなるか、あたしにもちよつと解らない。

私の日常はこうして変わった。これからの通学はとても楽しくなりそうだ。

それはそうと、なんだかこれって面倒くさい付き合いになりそうだなと、密かにあたしは思うのだった。

出会いから二日目の朝、今日は四人で話し合つて電車の時間を決めていた。昨日やっと彼の名前を聞き出せたんだ、収穫だわ。彼は木崎君、あたしよりレベルの高い高校に通学してるのよね。そして女子学生の方は砂原さん。女子高通学中、お嬢様タイプね、性格は

あたしとは正反対かな。そしてクラスメイトの荒川、運動馬鹿。コイツについては何も説明無しでも知っているからスルーだわ。

あたしは時間ぎりぎりでその電車に駆け込むようにして乗り込んだ。朝はどうも弱いんだよね。あたしは血圧が低い、と嘘をついて適当な理由を上げてみたりもするけれど。

車両に飛び込むとシルバーシートにだらしなく座ってヘッドホンをつけた男が目に入った。男の目の前にはおばあさんが居るのに気がついていない、ありがちなパターンだね、これって。普段のあたしなら相手にしないけれど座っている相手が弟となると話は別だ。家の愚弟め、全く何度言っても直しゃしないんだから。普段は弟と同じ時間の電車には乗らないのだけど、今回からは同じになっちゃうんだ。当然ギリなあたしより先に乗っていた。

すぐに弟の目の前で一言言ってやろうと移動すると、そこには昨日の三人が既に弟を険しい目つきで見ている。もしかしてあたしの弟、目をつけられてる？これは先になんとかしないと、まずいよ。

あたしは走ってヘッドホンを掴むと思いつき引つ張った。
「あんだ、何度言えば解るのよ全く。ほら、立ちな」

あたしが怒りの表情で弟を見下ろしていると、

「あ、ああ、姉ちゃんか」

全く動じない弟、周りをゆっくり見回してる。本当に鈍いなあ、家の愚弟は。まあ、これでも色々可愛い所あるんだけどね。見ると三人は本当に驚いた顔をしていた。なんだか気まずいなあ。そう言えばあたしが木崎君を好きになった状況って、彼が弟をあたしの代わりに叱ってくれている所を見たからなんだよな。切っ掛けってそんなものなのよ。

弟の目があたしの横の三人に釘づけになると、

「あれ、そいつら姉ちゃんの知り合い？」

「え？ああ、そうだけどつてあんた、人の話聞ってるの？」

「解ったよ。はいよ、ばあさん」

やっと立ち上がった弟はお婆さんに席を譲った。

「どうでもいいけどやっぱりそいつら姉ちゃんの知り合いなんだな。俺にいつも煩く言ってくるからそうじゃ無いかと思ってたんだよ」

「「え！」」

ハモりました。四人とも。

「勘弁してくれよ、朝くらい良いじゃんか」

ふて腐れた弟は別の車両へと消えていった。

「ごめん。あの迷惑な弟、実はあたしの家族なんだ。ところでみんなあいつの事今日始めてじゃないの？もしかして」

うなづく三人。話を纏めると荒川があたしが弟を叱ってるのを見てあたしが居ない時、弟を注意した事がある。砂原さんはそれを見たことがあってやはり注意したところ、逆切れされて荒川に助けられた事がある。木崎君は電車の外から砂原さんが弟に注意して逆切れされた所を見かけた、と。そしてあたしは木崎君が弟を叱る所を

見ている。その時弟が逆切れしそうになっているのをあたしは殺人視線で止めたけれどね。

あれ、という事は、起点は全てあたしの弟か？なるほど、ややこしい関係を作ったのも弟なのね。あいつ本当一回体液ゼロになるまで絞り上げなきゃいけない様だ。あたしは怒りの炎を燃やすのだった。

砂原さんと木崎君があたしを哀れむような眼で見ている。止めてください、泣きたくなるから。

「お前の弟って意外とダメな奴なのな」

荒川が余計な事を言ったので私の怒りは更に増すのだった。空気読めよ、荒川。

カーニバルは輝いて（前書き）

コンカースツリーは日本で言うトチの木のことです。

カーニバルは輝いて

空気を裂く発砲音が町に響き、カーニバルの始まりを知らせた。一年の豊作を喜び、来年の豊作を願う。誰もが自分を忘れて他人になりきり、神の顔を象った面を被り町を歩き交う。日常を忘れた私達は一様に浮かれ、全てを忘れて今日一日を楽しみ尽くす。町並みは祭の空気に飲み込まれ、日常で見る事のできない出店や大道芸人達が町を沸かせていた。

私はこの日、このカーニバルの間だけ恋人になる。私の相手も年に一度しか現れない。彼女はライトグリーンのドレスでその身を着飾り、黒の鴉を象ったマスクをつけて現れる。私は古き神の仮面で顔を遮り、彼女と一日限りの逢瀬を楽しむのだ。

町外れの草原に立つ、巨大なマロニエの古木、コンカーツリーの下に毎年彼女は現れる。ツリーの下には栗に似たコンカーの実が落ちており、それを子供達が拾い集め、紐をつけてぶつけ合っていた。彼女はそれを眺め、口元を緩めて佇んでいた。私は祭の始まりと共にその木の下へと毎年足を運ぶのだ。今年も変わらぬその姿に私は安堵する。

さあ、一日限りの私達だけのカーニバル、楽しみましょう。私は彼女の手を取り、その手に口づけする。今年も変わらず貴方に逢えた事を私は嬉しく思います、そう彼女が言った。

私が彼女に出会ったのは十年も前の事だ。彼女は十年前も今日と同じ様にコンカーツリーの下で子供達を見つめていた。私はその仮面の奥に潜む、エメラルドグリーンの瞳に何故か、とても興味を惹かれ、気がつけば彼女に話しかけていた。他愛も無い話を交わした

ただだったと思うが、それが私にとって実に掛替えの無い時間なのだという事に気がついた。私は恋に落ちていたのだ。

十年もの月日を繰り返しても私の感情は色褪せる事無くそこに存在している、素顔も素性も、名前ですら知らない彼女とのカーニバル。彼女もまた私に惹かれてしていると知った時から、私は永い間一日だけの夢を求め続けているのやも知れない。しかし、構わない。今日の私は一日しか存在し得ないのだから。

私達はゆっくりと仮面をつけた行列の中を縫うように歩く。その際にはできるだけ目立たぬよう行動をする。出身が地元でない者達は、仮面をつけないことからすぐに見分けがついた。私達は見られることを嫌った行きずりの旅行者の目に晒される事は恐ろしくは無い。この地の者に目をつけられる事が恐ろしいのだ。私が己の身を晒す事を恐れているわけではない。一日限りと言えど、私は彼女に害悪が及ぶのを恐れているのだ。人は愚かだ、恋愛や情事に対しての興味は恐ろしく強い。それは彼女も同じ様で私に気を使い、できる限りの目立つことの無い動きで人の群れの中を行き交った。祭の時間を愛でていた。お互いの内に有る、確かな恋の炎を確かめ合い、その炎に焼き尽くされぬよう、必要以上は求め合わない。

私は人の心が変わってしまう事が恐ろしい。私が貴方を求める事で貴方が変わってしまう事が恐ろしい。彼女がいつかそう言った事があった。人の心は移ろい易い、恋の炎も燃やしすぎれば勢いが無くなり、押さえすぎれば風に吹かれて消えてしまう。

だからこそ私達はお互いに必要以上触れ合わず一日限りの恋を永い間続けているのだ。

日が傾き始めた頃、町の通りでパレードが始まった。棒をズボン

の中に隠し、見せかけの長い足を悠然と進め、ランプを掲げた大道芸人を先頭に、三本の松明を両手に行き交わせながら歩く男が続く。後には何人もの仮面をつけた老若男女の行列が追う。皆松明を手にし、村はずれの丘へと向かった。私達もお互いの手を合わせ、列に加わり歩く。

やがて丘に到達すると丘の上には藁を球にしたものが用意されていた、カーニバルの最後はその藁球に火をつけて坂を転げ落とすのだ。それは来年の豊穰を祈願するまじないでもあり、同時にこの祭の終わりを意味していた。

藁球に松明の火を移す、私達も他の人間に合わせてそれに習う。これで私の今年の恋も終わりを告げる、そう感じていた時彼女が口を開いた。

貴方に伝えたい事が有るので

私達は人垣から離れ、炎が火の粉を撒き散らしながら坂を転がり落ちるのを遠目に、話し合った。

「人の時間は短い、私が貴方に声をかけられてから既に十年もの月日が過ぎてしまいました。これ以上貴方の時間を私如きが奪うわけには行かないのです」

「そんな事を貴女は口にすべきでは有りません。私は好きでこうしている、自分のためにこうしているのです」

私が有りのままの言葉を口にすると

「ならば、私の本当の姿を見ても、あなたは私を好いたままで居て

くれるでしょうか」

そう言い、私に背を向け、ドレスを肩口まで下ろした。露わになった背中には木皮がついていた。硬い、鱗のような木の肌。

「私はあのコンカーツリーそのもの、長き年月を経て。このカーニバルの間だけ人の身を得るに至りました。初めて感情を手にし、愛するという事の深さも知りました。私は幾度も恋をしました、けれどその先にあるのは悲しみばかり、私の背を見た誰もが恐怖して逃げてしまう。」

仮面をつけた私の表情はどう彼女に写っているだろうか？

「私は逃げた彼等に、もしこの事を他の人間に話したならば、貴方自身を殺さなければならぬと、長い間言い続けてきました。しかし、私は疲れてしまった。私の元で戯れる、愛おしい幼き子も今では数少なくなってしまった。所詮人ならざる者には愛は過ぎた感情なのですね」

彼女はそう言って仮面の下から涙をこぼした。私は言う、

「ならば、私が貴女を愛しましょう。真実の愛などは知らぬ私にそれを語る資格はありません。しかし、私は貴女を今までと同じ様に愛し続けることはできるでしょう」

私が彼女のその手を握ると彼女は仮面を外した。そこにはうら若き女性の美しい笑顔が刻まれている。その表情は人と変わらない笑顔だった。

私は彼女と同じ人に有らざる者だ。仮面として永き年月の間を人

の顔を遮り続け、いつしか私は人の感情を宿していた。カーニバルのこの日にだけ、私も人の体を得られるのだ。しかし、私達の体は共に木で出来ている。この身を焼き尽くさぬよう、身の丈にあった恋を続けていかなければならないだろう。願わくばこのやさしい時間が永遠に続くように。

ダストクラッシュ・ラストライブ

桜舞う季節、校舎の屋上で校庭を見下ろしながら俺達三人は馬鹿話で盛り上がりつつあった。三年間通い続けた俺達の高校生活ももう終わりかと思うとやはり、少し寂しい気がした。俺達三人はいつも行動を共にして校内で無茶したり、校則違反を繰り返したりしていた。俺達は同じバンドメンバーなんだ。

バンド名はダストクラッシュ。別にロックをイメージしてつけたわけじゃない。俺たち三人はガラクタなのさ。俺は指が短いからギターが弾けない。三浦は酷い音痴で歌えない。春日は指が一本無いからベースもギターも弾けない。

それで結局俺達は自分が一番やりたい楽器を選べずに、俺がボーカル。三浦がギター。春日がドラムをやってる訳だ。結局の所、俺達はさほど上手くない。好きでやってるだけだからな。高校でやる事と言ったらバンドと馬鹿な事くらいだろ？

実を言うと、俺達三人は元々そんなに中が良かったわけじゃない。春日は元は学校で天才ギタリストなんて呼ばれていた。将来有名なバンドを結成させられるんじゃないかなんてちやほやされてた。当人もかなり天狗になってたと俺は思ってた。実際かなり上手かったけどな、まあその頃はやつとろくに話したことも無かった上に、俺の嫉妬が記憶を歪ませてるから、その頃春日がどんなだったかなんて正確に覚えてる訳がないが。

ともかく、その頃春日はバイクで事故って指を一本切断されちゃった、抜いた車に向かって中指立てたりしてる春日がどう考えても悪い、自業自得だと思いが俺はそんな春日の馬鹿っぽい所が好きだ。

結果ギタリストの命の中指を失った春日は、ギタリストの夢もパーさ。

あいつが良く、俺の親が経営してる楽器屋へ通ってるのを見て俺はバンドに誘ったんだ。毎日弾けないギターを見に来る奴を俺と親父は放っておけなかった。今じゃ親父がドラムを教えてそこそこまで来ていると俺は思う。

三浦は親が医者をやってる秀才だ。あいつは俺と春日みたいに頭が悪いわけじゃないからな。成績は学年のトップクラスを走り続ける、俺らにとっちゃ鼻につくような奴だ。最初はだからかいけ好かない野郎だと思ってたよ。

ところがだ、俺と春日がバンドの話で盛り上がっていると三浦が俺も混ぜてくれないか、なんて言いやがった。当然俺らはお前じゃ無理だし、入れる気もない。そう言ったんだが、食い下がる。ボーカルをやらせてくれてしつこいから俺らは放課後、三浦とカラオケに行ったんだ。

そんだけ自信持って自分を押すんだからと聞いてみりゃ。俺と春日は呆然さ、余りに音痴過ぎて聞けたもんじゃねえ。笑った、爆笑した。こいつにもこんな欠点があるのかと俺達は逆に安心したけどな。残念だがボーカルは丁重に断念してもらい、俺達は三浦を受け入れた。

俺は、だ。本当はギターが弾きたいんだが、指が短いんだよな。弦まで届かねえのよ。初めはサイズの小さいギターでなんとか我慢しようとしたが、カッコつかねえのな、そんなんじゃもてないだろ。

まあ、思春期の奴がバンドをやる目的の一つってやっぱ、格好つけることにあると思うのよ俺は。親父も同じ経験してドラムに転向したらしいから正直この遺伝が恨めしい。

そんなこんなでポンコツ三人が寄せ集まって作ったバンドがダストクラッシュって訳だ。結成一年で卒業解散なんて最後まで笑えるバンドだったな。でもま、この一年で本当に色々盛り上げてきた、俺は満足さ。この後は三浦は進学、春日は東京で就職、俺は地元で就職だ。会つのも今日が最後。そして今日、俺達は密かに借りた鍵を使い、屋上に夜の内に持ってきた楽器をセッティングして卒業ライブを敢行しようとしてる、観客0、俺等のための俺等のライブ。最後くらいは自由にやりたいからな。

「なあ、どうするよ。何がやりたい？」

「あおさ、俺にボーカルやらせてくれね？」

俺はなんでも演れれば良かったが、三浦が自棄やひに食いついてくる。

「いや、お前の音痴。聞くに堪えねえ」

「いいじゃねえか。三浦に最後まで歌わせてやれよ。どうせ今日で最後だからな」

正直、俺はどっちでも良かったが、春日が乗るならしかたねえかな。

「仕方ねえな。じゃ、俺は聞いてるわ」

「ドラムだけで演奏つてのも冴えないからな、三浦のアカペラで頼むわ」

考えてみりゃこれじゃバンドにならねえな。そう思いつつも、三浦一人のアカペラなら少し面白そうだと俺は気がつく。

「んだよ、仕方ねえな、じゃ、俺の美声を聞きほれろ」

三浦の美声も聞き納めか、そう思うと俺も寂しいね。見ると春日が微妙ににやけている。俺も少し笑い気味だがな。こうやって馬鹿笑いするのも最後かと思うと寂しい。

「ビートルズ、Let It Be」

When I find myself in times of
trouble

随分渋い曲を選ぶなと俺は思い、歌い始めから音を外す三浦を期待して盛大に笑ってやろうと準備してた。

Mother Mary comes to me

ところが三浦は初めから音も外さず、しつかりとした音程で歌い始めた。むしろ人並みより上手いくらいだ。俺と春日は呆然さ。気がついたらやつの声に聞き入ってた。

Let it be let it be Let it be
yeah let it be Whisper words o
f wisdom let it be

歌が終わったことに気がついてはつとした俺は、口を開こうとすると、三浦が先に言った。

「俺はさ、お前等と居る時だけ本当の自分でいられる気がしてた。お前等に声をかけたのは正直、俺の気まぐれだったさ。馬鹿がやれば誰でも良かった、真面目人間を自分で演じ続けるのが嫌になつてな。だから、本当は俺は音痴ではなかったんだ。お前等に認められるためについた嘘だ」

「お前、ふざけんな！今までずっとか」

春日が怒って三浦の襟首を掴む、

「でもな、いつの間にかもつ。お前等じゃなけりや駄目だと思つてた。本当の自分はお前等の前だけで晒してた。騙したのは悪かった、だから最後くらいは俺の本当をお前等に隠しておくわけにはいかなかったんだ。音痴のままだと思われてるのも癪だしな」

「ふざけんなよ。今更何言ってるんだ！」

俺はそう言って殴りかかろうとする。春日は襟首を掴んだまま動かなかった。

「お前等だつて俺に隠してる事があるだろうが！俺は知ってる。お前等、ギター諦めてないだろ、気がつきゃ毎日隠れてこそこそ練習してたじゃねえか。俺が知らないとでも思ってたかよ！」

三浦に言われて、俺は動きを止める。ああ、知ってたさ。春日が俺等が居ない時、ギター鳴らしてたのはな。俺もそうだったから、でも今更言えねえよ。かつこ悪いじゃねえか。

「俺は思ったんだ、最後までいい自分の好きな演奏したいってな。だからお前等もギター弾けよ。最後だろうが!」

「でも、ギターなんか持って来てない。お前のしか無いだろ」

「抜かりねえよ。店長に頼んだ」

見ると屋上のドアが少し開いていて親父が覗いてやがった。手にはギターを二本持つてる。一本は俺愛用の小ギター、もう一本は親父が特別製作した春日用のギターだ。

「お前等、青春してるねえ。俺も懐かしくなった。俺がドラムやるからお前と春日君はギターやれ」

「親父、勝手に気い効かせやがって、下らなねえ事すんなよ」

そう言いつつ、俺は満更でもなかった。最後の曲は、親父を考慮して、ブルーハーツのリンダリンダを演った。

演奏中、三浦が声を震わせて泣き始めやがったから俺も不覚にもつられて泣いた。三人とも号泣だ、更にもらい泣きしやがった親父には引いたが。お陰で演奏も声もガタガタ、最低なライブだった、だが俺等「ダストクラッシュ」最後のライブには相応しい演奏だ。俺達は最後の最後でやっとまともなバンドになれたんだ。

俺は最後に全てを曲にぶつける事が出来て満足した。その後、職員室に呼ばれて全員説教を食らったのもいい思い出。高校生活思い残しは何も無い。俺達は笑って別れられた、それで満足だ。

先生方に説教食らう、親父のしょぼくれた顔も見ることができたしな。

ネイティブスピリッツ

俺は駆った。赤茶けた粉土を巻き上げ、枯れ草を踏み折り。

大切なモノが無くなるうとしていた。一度失って又、再度得たモノを。

もう俺は失いたくは無。かけがえの無い仲間を、穏やかな日々を。

俺の仲間はやつらに一人残らず殺された、火を噴き、鉄の弾を飛ばす雷の杖。撃たれたものはまず助からなかった。俺は辛うじて逃げ切ったけれど、それからの毎日は思い出したくも無い程に辛かった。俺の仲間は戦ったんだ、兄弟や親、友が次々と倒される中、それでも己の武器をやつらに向け続けた。

俺は、俺には無理だった。怖かったんだ、死ぬ事が。仲間を失う事より自分の命を優先してしまった。俺の牙は、その時折れたんだ。やつらに屈した時、ぽつきりと。

俺達の間で神聖とされる場所があった。巨大な一枚岩、その一箇所に作られたように削り取られた穴がある、低いブツシュに隠されて判り難い穴だ。その穴を潜り、奥へ向かうと岩に囲まれた大地に出る。そこは中心に向けて台地が傾斜していてまるで空にある月がそこに落ちたならこんな形になるんじゃないかと思わせるような、そんな大地だ。

そこからは月や星が良く見えて、壁には俺達の先祖や鷲、巨大な牛などの絵が描かれているんだ。星降りの大地、俺達はそう呼んでいた。そこなら誰にも見つからない、俺はそう思った。

俺は傷ついた体を癒すため、星降りの大地に向かった。恐ろしい

やつらから逃げ切るために俺は全てを忘れて只管ひたすらに走った、体を木にぶちあてても、岩の上から落ちて足を捻つても、それでも痛みをも忘れて走り続けた。気がつけば辺りは星明りに包まれていた。覚おぼ束つかない足をなんとか進め、ぶれる体を叩き起こして朦朧もろうとする意識の中で岩の洞を抜け、やっと大地についた時、俺の意識は途切れてしまった。

俺がトオボエに会ったのはそれからすぐ後だった。意識が戻ると目に映ったのは木につけられた炎だった。その炎の向こうに男が座っている。俺はすぐに起き上がり、逃げようとした。その時はやつらの仲間だと思っただ。殺されてしまふ、こんな所まで追いかけてきたのか。でも、俺は動けなかった。あの雷の杖、あれに狙われたらもう俺は助からない。背を向けることが怖かった。男は暫ひやく無言で俺を見つめると、すぐにこう言った。

「心配する必要は無い、爺はお前を食おうとは思っていない。爺の事はトオボエと呼ぶといい」

トオボエは煙の出る棒を咥え、空を見上げた。俺もつられて空を見上げる、巨大な月が俺達を照らし出していた。そうかと、気がつく。いつの間にか夜が降りていたんだ。

トオボエの姿は良く見るとやつらとは全く違っていた。頭には驚の羽根をつけ、体には赤茶の皮布を身に着けていた。焚き火の向こうには皮布と同じ素材で作られた三角形の風除けが作られている。トオボエはその中から乾いた干し肉を取り出して俺に投げよこした。

「腹が減っているだろう、ケダカキキバよ。それを食べると良い」

俺は何も言わずただ、その肉に無心で喰らいついた。確かに腹が

減っていた。何日も食わずに走り続けたんだ。喉を詰まらす俺にトオボ工は笑みを浮かべながら皮袋入りの水を飲ませた。その日から俺とトオボ工の生活が始まった。

トオボ工は夜になると良く歌を歌った。言葉はついていない、まるで高音の風のような音を喉から出して。月や星明かりに照らされて歌うトオボ工はなんだかとても神々しくて気持ちがとても落ち着いていた。俺は歌を聴くお礼にと昼に狩に出かけ、兎や小型の小動物を狩って持ち帰った。トオボ工は何日かに一度だけ遠出して2、3回昼と夜が繰り返すまで戻らないときが在る。自分のための薬草を探しに行くのだと俺に言った。そんな時は俺は一人でこの地を守った。ここが今の俺の故郷なんだ。

そんなある日、トオボ工が薬草を取りに出かけてカシコキツメを連れて帰って来た。カシコキツメは体に怪我を負っていた。どうやら雷の杖に撃たれたらしい、トオボ工は最初からそいつの事をカシコキツメと呼んだ。俺も助けられた身だ、そいつの事をカシコキツメと呼ぶ事にする。そいつが気を取り戻したとき、やはり俺達を憎しみの目で見つめた、すぐに自分が逃げられない事に気がつくと恐れて身を縮ませる。トオボ工は俺と時と同じ様に自分のことを紹介し。俺の事も付け加えた。

「爺はトオボ工と呼ぶといい、そこに居るのはケダカキキバだ。今はお前を襲う者はいない。安心するといい」

そこへ俺は付け加える。お前は今日からカシコキツメだ。俺達はお前を襲わない。

それからの日は少し賑やかだった。怪我を治したカシコキツメは結局ここにいついてしまった。俺と同じだ。俺とカシコキツメは狩

りの勝負をした。どちらが多く獲物を狩れるかを競ったんだ。

「あたいとあんた、どっちが獲物を多く獲れるか勝負しようじゃないか」

「俺は狩には自信があるからな。いくらお前でも相手が悪い」

お互いそう言い合い、大地を駆け、飛び回る。

そうして狩った獲物を持ち帰ってトオボ工に見せるとトオボ工は悲しげな顔をした。俺とカシコキツメは何故そんな顔をするのかが解らなかった。

「爺はお前達が必要以上の命を狩った事を悲しく思うのだ。かつてこの地にはバッファローと言う巨大な牛が存在していた。彼らは爺たちと友であり、敵であり、そして生活の支えでもあった。バッファローと命のやり取りをして爺たちは生かされていた、そして時には爺たちはバッファローを守った。必要以上の狩りはしなかったのだ。バッファローと共に大地を移動し、外敵から守り、弱り、死期の近いバッファローと戦い、勝ち得た物だけを爺たちは恵みとして受け取った。だが、時代は変わってしまった。白き肌の民が現れ、バッファローを雷の杖で狩り出した。爺たちは止めた、しかし彼らは耳を貸そうとせず、爺たちをもその杖で撃ち殺した。もう、止める事は叶わなかった。それでも爺はバッファローが居なくなる事など有り得ないと思っていた。いつしか、バッファローの屍骸は殺した者に埋葬される事も無く野ざらしのまま、腐り行くようになった。大地はバッファローの屍骸と血で染まった。そしてこの大地一片にすらバッファローは居なくなってしまった。白き肌の民はただの遊びでバッファローを滅ぼしたのだ。爺達は生きてゆくための術を失った。爺はせめてもの手向けに毎日夜に歌うのだ。我が友、我が家

族があゝの星の海に辿りつくように」

俺は気がついた、これでは俺はやつらと同じじゃないか。カシコキツメもはつとした様に自分が手をかけた獲物を横目で見た。俺達は誓った、明日からは必要以上の命は狩らないと。

それから暫くは穏やかな日々が続いた。昼は狩りに出かけ、夜はトオボエの歌に耳を傾ける。トオボエは色々な事を俺達に教えてくれた。そんな中、俺は一つだけ気になるものがあつた。生きているものは皆、死んだらあゝの空の星の川へと向かうのだと。次に月が赤く染まる時、トオボエはあゝの川へと行くだろうと言つたんだ。俺はトオボエがいない生活などもう、考える事が出来なかつた。

トオボエがある朝、苦しそうに呻いて動けなくなつた。俺とカシコキツメはトオボエに聞いた、どうしたら良いかと。トオボエは言う、薬草を願えるか、と。俺とカシコキツメはいつもトオボエが噛んでいる草が薬草なのだと言う事をしていて。そうして俺とカシコキツメは同時に薬草を探すために大地を巡つた。

俺は駆つた。赤茶けた粉土を巻き上げ、枯れ草を踏み折り。大切なモノが無くなるうとしていた。一度失つて又、再度得たモノを。

もう俺は失いたくは無い。かけがえの無い仲間を、穏やかな日々を。

一日が過ぎ、二日目の昼。谷間を通りかかると見上げる岸壁の上、岩場がせり出した少しの空間、そこに苔の上に根を降ろした薬草の姿が見えた。俺は体を跳躍させ、器用に飛んで岩壁を登る。目的の岩場に立ち留まり、薬草を取ろうとした時、強烈な横風が俺の体を攪つた。俺は必死で薬草に噛み付き、それを口に咥える。だが、俺の体は空中へと投げ出された。全てが緩やかに見える、迫り来る赤

い地面がやがて来る結果を想像させた。それでも俺は薬草をこの口から落とす訳には行かない。これが無ければ俺は、トオボ工は。すると背中激痛が走った。体が一瞬空中に浮き上がる。背中から声が聞こえた。

「あたいがあなたを助けるなんてね。これを最後にしておくれよ。あんたは重いからあたいの翼じゃあまり支えられそうも無い。もう少し高さが下がったらあんたを放す、だから気をつけて着地しな」

カシコキツメだ。そう、俺は狼でカシコキツメは鷹だった。トオボ工はやつらと同じ人間なのに俺達を殺さなかった。それ以上にトオボ工は俺達の言葉が理解できている気がした。だから信じられた。今はもうトオボ工は俺達の仲間なんだ。そうか、俺は気がついた、守ることが本当の強さなのだ。ただ相手を殺す事だけが強さではないのだと。俺とカシコキツメは大急ぎで星降りの大いへ走った。

トオボ工は息も絶え絶えだった。明らさまに死期が近づいている事が俺にも解る。そんな状態なのに体を起こし、足を組んで顔を上げ、声を切らして言う。

「爺はもうその薬草は必要としない。気高き牙よ、お前はもう牙を取り戻した。後はお前一人でも生きて行けるだろう。賢き爪よお前はもう知を得た。後はお前一人でも生きて行けるだろう。爺は仲間のお元へ行かねばならん、大丈夫だ、お前達の中で爺は生き続けるだろう。お前達に最後の頼みがある。今宵こよひの赤き月の晩、爺を見送ってくれ。お前達狼と鷹は星の川までの案内役。爺は同じだ、お前達と同じ。爺の体には白き肌の民が放った鉄の弾が幾つか食い込んでいる。この呪い、痛みに負ける事無く仲間が殺されたこの晩まで生き抜く事、それが爺の戦いだった。一年この地で仲間を祈った、これもお前達が居てくれた、だからこそ叶った。爺の遠吠えは仲間

届いただろう。お前達に礼を言う、ありがとう」

トオボエはそれだけ言うと頷くように顎あごを下に落とし、そのまま動かなくなった。

俺とカシコキツメはトオボエの亡骸なきがらを夜が降りるまで見つめていた。空にはトオボエの言葉の通り、赤い月が昇っていた。星の瞬きが普段よりも眩しく見え、月の光が星降りの丘を満たす様に降り注いでいた。俺はトオボエのために月に向かって咆えた。耳に残るあのトオボエの歌を思い出しながら。やがて、トオボエの体が輝きだす。星程の輝きは無いけれど、それはとても暖かな光だ。すぐに光は体を抜けて空へと昇り始める。カシコキツメがそれを見て翼を広げ、先導して空へと舞い上がる。二つは見えなくなるまで空を昇って行った。

どこまでも、どこまでも。

チューナー・イン・ザ・レイン（前書き）

当初連載で何話か続ける事を予定していた作品なのですが。面倒だから良いや、単発で。投げやりで済みません。

チューナー・イン・ザ・レイン

雨が降り続いていった。視界に入りきる空の全てを厚く薄汚れた羊毛の様な雲が覆い、遠雷の激音と一瞬の雷光の閃きが数分に一度、遠方にまるで模型のように小さく建物が立ち並ぶ街を照らし出した。山際の長閑な町、田畑が階段のように段差をつけ、目前に重なる様にして連なっている。辛うじて舗装されている道は罅割れて、長い間風雨に晒され、人や車にならされて来たことを物語っていた。道脇に今にも崩れ落ちそうな程、朽ちかかったバスの小屋形停留所が建っていて、吹き込む雨風を辛うじてトタンが防いでいた。屋根に落ちる雨粒の音がシンバルを打ち鳴らしたように響いている。停留所内には十代半ば程の少女が一人古く黒ずんだベンチに座り、ただ呆然と雨に濡れる町を眺めていた。

雨は絶え間なく息もつかさぬ程に降り続けている。

「わたしは何がしたかったんだろうか」

少女が呻くように一人ごちた。雨音が遠くなる、雨が少し弱まったようだ。

「あなたは迷っているのですね。どちらの道を選ぼうかと言う選択に」

唐突に相槌を打たれ、少女は驚いて声の方向を見上げる、いつの間にか気がつかぬ間にそこに居たのは幼い少年だった。

小学生くらいの男の子。黒髪をおかっぱの様に切り揃え、頭には黒の兎の耳のついた毛皮の帽子を乗せている。背中には一見してマントのように見える黒いコートを羽織り、黒のワイシャツ、黒のズボンを着込んでいた。

一見して目を惹いたのは、特異だと直に解ってしまう瞳の色だ。少年は右目と左目で瞳の色が違っていた。それに気がついたのか、少年は己の瞳を指差す。

「誰もが僕の目を始めに気にするようですね。これはオッド・アイでは有りません。生まれつき左右の目の色が違う人間が生まれる事がある。彼らの事をオッド・アイと呼ぶのですが、僕の場合は只の義眼です。最も、義眼の中でも特注品なのですが」

男の子はそういった疑問を投げかけられる事に馴れているのか、馴れた手順でさも当然であるかの様に左目を外して見せた。それは宝石の様に美しいグランブルーの瞳が細工されていて光の加減によって青の濃度が変わって見える不思議な作りをしていた。

少女が魅せられるままにその眼球に視線を釘付けにすると、その球体の中に少女の姿が歪曲して映りこみ、世界の姿をその水晶体、光彩のブルーの海の中に閉じ込めているのが反射して見える。

「すみませんが、これをあなたにあげる事は出来ません。僕にとっても特別な物なのでね」

少年は控えめに手を上げ、少年はそう言って器用にまた左目を目の中に戻す。

「別に欲しいと思ってないわ。ところで、あなた。いつからここに居たの？」

少女が見透かされた事を恥じるように訝しげに少年に尋ねた、

「先ほど、来たばかりです。僕もこの雨の中流石に歩き回る勇氣は無い」

少女が少年の体を下から上へと睨^めねつける。

「その割には君、全く濡れてないのね」

「僕の服は特別製でして、水を弾くんですよ。ふふ、珍しいでしょう。それでいて風通しの方も中々です」

少年は立ち上がり、コートを蝙蝠の様に羽ばたかせ、僅かに残った水飛沫を払い落として猫のような目を細めて笑った。

「君、この辺の人じゃないよね。私、君を見た事が無いもの」

「当然でしょう、僕は旅人ですからね。一所に落ち着くことはほぼ無い事ですから」

「君のお父さんお母さんはお仕事が忙しいって事なのかな？」

その歳で旅人なんて有り得ない。そう思い、少女はなんだかこの少年の境遇を可哀想だと思えてきた。

「僕は楽しんでますよ。少なくとも数多くの体験を経験する事は出来ますからね。人との繋がりはあまり持てませんが、こうしてあなたのような始めて見る人と新しい出会いを重ね、話す事が出来ますからね」

少年は義眼の左目だけを閉じてウィンクをしてみせる。少女はそのしぐさが可笑しかったのか少し笑った。

「けれど、残念ながら僕のような生活を続けるものはどうしても、

人と深く付き合う事が叶いません。それが少し寂しいですけど」

「でも、人と付き合うことって楽しいことだけじゃないでしょう。付き合いが深くなる事で、相手の嫌な所も見なければいけないんじゃない」

「それが面白い、そう思いませんか？自分の嫌な所を見せる事で始めて、人と人は打ち解ける。僕はそう思いますよ」

少年は一人悟ったように頷く。少女は納得がいかないのか、

「私はそれが怖い。だって誰もが少なからず仮面のような物を被っているでしょう？他人の前で自分を曝さらけ出す事なんて、今まで作り続けてきた自分を否定しなきゃいけないもの」

少年はその言葉を聴いて眼を閉じた。

「あなたは、他人の優しさに触れる事が怖いのですね。それとも、突然否定されてしまうとと言う事が恐ろしいのか。どちらにしてもあなたには勇気が必要だ、もっと強くおなりなさい」

その言葉が少女の逆鱗りきりんに触れたのか、少女は唇を戦慄せんれつかせ、叫ぶ。

「そんな事！なんて言われなきゃいけないの！」

怒りに震える少女の背中を少年は優しく撫でる。

「落ち着いてください。あなたは強い人ですよ、ただ今は気持ちが揺らいでいるだけなのです」

少年にそう言われ、少女は何故この少年にこんな話を話してこれ程に取り乱してしまったのかと恥ずかしくなった。

「ごめん。私、なんで君にあんなにむきになったのか解らない」

「気にしていません、それよりも、あなたにあれが見えますか？」

少年が指差す先には降り続ける雨と田畑が見えるだけだ、見えるだけだったのだが。

「あれは、塔？あんなもの、この辺には無かったはずなのに」

少女の目には雨が降り続く街の向こう側にうつすらと透明の塔が映っていた。

「あの塔が見えると言う事はやはりあなただったのですね」

少年はさも平然と全てを知ったものが口にするような平坦なトーンで話す。

「あれが見えると言う事は、あなたは少なからず歪みの影響を受けている。放って置けば歪みはすぐに世界に広がってしまいます。誰かが直さなければならぬ。僕は、世界のゆらぎの中に存在する人間です、僕達は今は調律師と呼ばれています」

少女はそれを聞いて首を傾げ、一体この子は何を言っているのだろうと疑問の瞳を彼に投げかけた。

「今は、あなたには解らないかも知れない。世界はこの所、ぶれが激しいのです。連なる世界の姿が交じり合おうとしている。現代の

人は自ら不協和音を奏で過ぎなのですよ。精神も肉体も、全てが歪み始めていると言うのに未だにそれに気がつかうとしない、いや気がついているのに治そうとしないだけなのかもしれません。それが世界にどんな影響を及ぼしているのかなど、誰も考えてはいません」

「私は君の言っている事が何一つ解らないわ、君の空想には付き合いきれない。私に何が言いたいのか？」

少女は会話が通じない少年に苛立ちを感じ始めていた。同じ言語を使用しているのに相手に伝わらない、少女はその手の苛立ちに厭あいでいた。そんな少女の肩にやんわりと手を置いて、少年は少女の顔を覗き込むように体勢を変える。

「落ち着いて下さい。僕はあなたを癒すためにここに来たのです。都市ならば進行が速い事は仕方がない、しかし、この場ではこの進度は速すぎる」

少年の悲しそうな顔が雷光で一瞬輝く。義眼と言っていた左目の青い色が蛍光の様にぼつと輝いた。

「なぜ、燃やしたのです？」

そんな少年の瞳が少女の両目を捉えて、そう言った。

「私には、何の事が解らないわ」

少女は思う所が有るのか目を逸らして消え入りそうな声で主張する。

「なぜ、火をつけなければならなかったのですか？」

「し、知らない。私は知らない。火なんてつけてないもの」

「あなたの鞆、やけに嚴重に抱えて居ますね。ガソリンは危険ですよ、完全に密封しないとすぐに気化して隙間から流れ出てしまう。気がつかなかったんですか？かなり匂っています」

「そんな事、私はまだ何も、何もしてないじゃない。雨がこんなに激しくなるなんて思わなかったのだもの」

少女は俯^{うつむ}き、目に涙を溜めて言う。

「私はただ目立ちたかっただけ、誰かに注目されたかっただけなの。このまま誰にも注目されずにただ平凡な毎日を過ごしていく事に耐えられなかったのよ」

「違いますね。あなたは偽っている。僕が聞いているのはその子に對してじゃない、貴女に對して言っているのですよ」

少年にそう言われ、少女は目を大きく開く。

「それはどういった意味かしら？」

「そのままの意味ですよ。言ったでしょう。僕の義眼は特注なので、この義眼は見えないものを見る事に使用するのは。貴女はその子の母親でしょう？本来守るべき立場の貴女がそんな事をさせてはその子があまりに可哀想です」

まさか、と言う表情を浮かべた少女が少年の義眼を覗き込むと、映りこむ少女の姿が少女に良く似た、少女が十数年を経たならばこ

うなるであろうと思われるような女性の姿に変わっていた。その姿がコマ割で目まぐるしい速度で移り変わる。それは家族が生活をす
る映像だ。その中には少女や少女の父親であろう者の姿をもが、垣
間見える。

少女が父親の姿を確認した途端、顔が鬼のような形相に変わった。

「お前は一体何なんだ！この子を私は守ろうとしただけなのに。こ
の子の父親はとんでもない奴なんだよ！私が守ってやらなきゃだめ
なんだ！」

「そんな子を捨てて勝手に自殺したのはあなたでしょう。僕は言い
ましたよね、もっと強くおなりなさいと。あなたが娘を信じてあげ
ないでどうするのです？」

「誰も助けてなんかくれやしない。この子が毎日父親にどんな仕打
ちを受けているか」

「ならば、なぜ父親に憑かないのですか？あなたはそんな姿になっ
てもまだ、優しかった父親の姿が忘れられないのでしょうか？憎めな
いのでしょうか？父親がそんな事になってしまったのも貴女が死んで
しまったからなのでしょう」

少女の瞳の中の怒りの色が薄れてゆく。

「私は、私はただ、自信がなかったのよ。仕事ばかりのあの人とこ
の子を一人で支えていく事が。私が例え自殺でも死ぬ事ができれば、
この子やあの人に少しでも保険金が下りる。疲れていたの、それが
一番楽だと、そう思ってしまったのよ」

「だから皆燃やしてしまおうと思ったのですか？娘も、父親も、家

も思い出も。あなたはその子の誰かにその苦しみを知られたいという気持ちを利用した。燻^{くすぶ}っていた炭に火をつけた。その子が自分で火を消せるかもしれないという可能性を消してしまった。それはとても卑劣な事です。けれど、貴女はまだ迷っていたはず。止めるべきか止めないべきかを」

「もう戻れないのよ、あの人もこの子も。私が生きていた時代には戻れない、なら一層の事終わらせてしまった方が良くに決まってる」

「それをさせる訳には行きません。それをされてしまえば、僕の仕事もつと増えてしまう、不協和音が広がってしまうのです。それにあなたの感情にも少なからずこの不協和音が影響している、残念ながら世界は逼迫^{ひっぱく}した状態にあるのです」

少年がそう叫ぶと同時にコートの下から何かを取り出した。

それは糸がついた鈴だった。少年はその糸を指で掴み、鈴を下へと落とす。鈴は地面につく前に止まり、鈴が澄んだ音をたてる。

R i n n e e e

音が染み入る様に辺りに響き渡り、少女は穏やかな顔つきに変わる。

「私は、なんて事をこの子にさせようとしていたのだろう。結局私はこの子に生きていた時も、死んでも何一つしてあげられなかった。母親失格ね」

少年は少女を強い目線で見つめて言った。

「そんな事は有りません。あなたは初めは純粹に娘を思う気持ちから、守るために憑いたはずなんです。この子も少なからず感じていた筈ですよ。母親の温かみを」

「あなたはそんな小さな姿をしているけれど、私よりもずっと長くこの世の中を渡っているのね。そんな気がする、私がこの子に出来る事はもうきつと無い。大人しく消えるわ。あの時もこんな気持ちで居られたなら、私は死なずに済んだかもしれない」

少年は目を逸らす。

「僕はいつも遅いんです、異常が起きてからでないと僕は対処が出来ない。済みません、僕が事前に異常に気がつく事ができれば」

「私はもう充分。あなたが止めてくれないければこの子はもっと酷い事になってしまっていた。最後にこの子に伝えておいて。母はあなたの事を本当に大切に思っています、と」

少女は気が抜けたように木のベンチの上に倒れこむ。それを少年は悲しそうに見つめていた。少年はもう一度鈴を鳴らす。

「これは僕からの弔いつむいです」

停留所の中を音が響く。すると少年が頭に載せていた毛皮の耳がびくりと震え、動き出した。赤い眼を開き、耳を立てる。

「まさか、正気の鈴を使うとはな。あれは霊体だろうが。鈴を使った調律は霊体には利き難い、そう言っただろう。お前なら簡単に払う事も出来たはずだ」

毛皮がそう言葉を吐いた。

「僕はそんな事は望んでいません。ただ払うだけならば霊能者にも任せればいい、けれど、僕は調律師なのです。あの母親を正気に戻してあげたかった。それに乃羽の感知がもつと速ければここまでにはならなかった筈なのですよ」

少年は目を鋭くさせて頭上を見る。けれど赤目の当兎にはその視線は届かない。

「失敗したらどうするつもりだったんだ」

「その時はまた、別の手を考えます」

「殊勝ツトシゴトな事だ、その調子だと父親の方も調律をしに行くのだろうか？ お前はもつと物事を簡略化させられる能が必要だな。次も上手くいくと良いが」

それだけ言っただけで毛皮だった物はまた眠るように眼を閉じて何も言わなくなった。

すぐに少女が突然何も無かったかの様に起き上がる。

「あれ？私はどうしたんだろう。確か学校の用務室からガソリンを盗んで、何するつもりだったんだろう？」

「あなたは何も気にしないで良いのです。もう終わったことですから」

少年は無邪気な笑みを顔に浮かべ、そう言った。それに気がついた

少女が辺りを見回した上で少年に目を合わせた。

「君は、誰？私は夢を見ていた気がするの。お母さんが、あの頃の優しいお母さんが私の体を抱いている夢。こんな事今始めて出会った君に言うのもおかしいよね。でも君のその瞳を見ていたら何故か言わずにはいられない気がしたの」

「当然ですよ、あなたの母親は今でもあなたの事を大切に思っているのです」

そう言われ、少女は照れるように笑い、いつの間にかそれまでの豪雨が嘘の様に消えた、晴れ上がった空を眩しそうに見上げた。

ブリュッケ

ブルックリン橋からアメリカの象徴、自由の女神を眺めていた。均等に張られた鋼鉄のワイヤの隙間からハドソン川を行き交う船をぼんやりと横目で見ながら緩やかに過ぎ行く時間をただ漫然と過ごす、これが俺の休日のある方だ。

この橋は2008年現在、125歳を迎える古い橋だ。同時期の時代に作られた別の橋は今、ほぼ残されていないと言っている。当時の時代を感じさせるゴシック調の作りが俺を安心させる。自由の女神と同様にこの橋もまた象徴なのだ。

125年と言えばちよつとした年数だ。一世紀を超えて生き残り続ける橋、ちよつとした遺跡みたいなものだ。人間など歴史が文章や資料で残されていないければ10年前の事もろくに憶えていられない生き物だ。文章は信用ならない、そこには少なからず書いた人間の心象が付与されるからだ。

実際残された文献など、本当にその当時の時代を経験してみなければ、信用に足り得るものかなどといった判断は出来ないはずなのだ。それに比べ、建造物は当時のそのままの姿で残り続ける確かな記憶だ。当時の黒と白に統一された二色の世界、俺はそれをこの橋の上で思い浮かべ、色で溢れている現在を頭の片隅に追いやる。

口に啜えた煙草を燻らせれば精神化が進み、気が休まらない世界から一時的に逃れられる、そんな気分を味わえた。このところ仕事が上手く進展しないため、俺は休日に関心しようと言う気が尽く失われていた。暇な時間を見つけてはこうして橋から外を眺め、橋と一体化した気で空想に耽る。それが今の俺の日課だった。

セントラルパークでのランニングや読書など、有用性の有る行動を本当ならば取るべきなのだろうが。とにかく俺は今ただ、時間を垂れ流すように消費する行為、それこそが贅沢なんだと自分に納得させている。

ああ、そうだ。俺は退廃的たいはいてきな人間なのだ。会社で上司に世辞せじをのべ機嫌を取り、出来る同僚の付き合いを優先させ、プライベートと精神を削る毎日、そんなものからはこの時ばかりは開放されたい。この所、テロと不況の影響からか街の中は緊張が続いている。穏やかで緩やかな時間は以前より感じにくくなってきている気がしていた。ストレスが国中に充満しているのか。この橋が本当の遺跡となる日も、そう遠く無いのかもしれない。

俺は暫くひまじ眺めていた川から振り返り、歩道を見やる。すると猛スピードで自転車がすれすれに走り抜けていった。忙しい事だ、何をそんなに急ぐ必要があるのか。俺も明日にはその言葉を吐くことは難しくなって居るのだろうが。燃え尽き様としている煙草を地面に落とし、踏み潰しているとそこに見知った顔が現れた。

「あなた、まだやっているのね。毎回言っているのに全く聞かないのだから」

そこには長髪をポニーテールにまとめ、パーカーとデニムを着てサングラスをかけ、足がシカのように筋肉質の金髪の女性が居た。化粧を全くしていないのか鼻横にはうっすらとそばかすが見える。

彼女はルーシーだ。一方的に名前を打ち明けられ、未だに俺は自分の名前を紹介した覚えが無い。毎日決まった時間にここをルートにしてジョギングを繰り返しているらしい。毎度俺は彼女に会う度

に話しかけられ、それが当たり前のことの様にパターン化されていた。どうやら俺の煙草が頗るすこぶ気に入らないようでそれに毎回食って掛かるのだ。俺は彼女を見て、ああ、もうそんな時間なのかとはたと気がついた。

「俺は毎回言ってるだろう。退廃的で後ろ向きな人間は明日の事なんざ考えないのさ」

「そんな事ばかり言っているとその内本当に後悔する事になるわよ」
ルーシーは耳にかかる髪をかきあげ、同時にサングラスを持ち上げた。

「あんたも懲りない人間だ。俺みたいな人間に話しかける時間が有るならば、もっと運動に力を入れた方が良くんじゃないか？」

「私は思った事は口に出さないと我慢できない性分なのよ。あなたと言う人は全く困った人だわ、一度や二度じゃあないでしょう」

「しかしあんた、俺みたいにこの橋で煙草を吸ってる人間が居たら必ず話しかけて回ってるのか？だとしたらとんだお人好しだな」

それを言われると彼女はブルーの片目を半眼にして掌てのひらを上に向け、

「私はそこまで馬鹿じゃないし、良心的でもないわよ。話しかける人間は確かに選んでるつもり。あなたはどうもそれ程悪い人じゃ無さそうだったから。それにあなた、最近良く見かけるでしょう？」

俺はどうでも良い事を良く見ているなと思いつつ頭を掻いた。

「今はどこも暇なのさ、俺の仕事もワークシェアリングでね。暇な時間が増えてしまった。ただ、それだけの事なんだ。ストレスをこらやうって解消するのも俺なりのやり方なのさ」

勤務時間が減った事は間違いないことなのだが、その影で確実に仕事の密度が増していた。毎日の激務は確実に俺の体力と精神を疲弊ひげいさせている。そういった短時間過密労働は俺のライフスタイルに合っていないのだ。

「大変なのは解るけれど感心は出来ないわね。煙草なんて体に悪いだけじゃない。なんで前向きになれないのかしら」

「俺の前向きはあんたには後ろ向きに見える訳だ。見解の違いって奴だな」

俺は鼻で笑ってそう言っただけでやった。

「そうやって憎まれ口ばかり叩くのがあなたの話し方なのね」

視線を逸らし首を左に傾け、唇を歪めた彼女が話しかけるでも無くそう言う。

「このブルックリン橋のブルックリンて元はドイツ語のブリュッケから来ているらしいのよ。ブリュッケはドイツ語で橋と言う意味なの。だからブルックリン橋は二重の意味で橋なのよ」

彼女が手すりに寄り、下の川を見つめる。

「だから、私の言葉があなたに橋をかけられると思ったの。最初は更生目的であなたに話しかけていたけれど。でも最近はおあなたのこと

が気になつて仕方ないのよ」

そう言つて振り返り、彼女は魅力的な笑顔で笑つた。俺はただ、溜息を一つつき、地面に視線を下ろしてこんな日も有るんだなと思ひながら一言。

「本気で言つてるのかい？俺には俺の良さが解らんよ。それなのにあんたには俺の良さが解るのかね」

「冗談なんて言わないわよ。私はあなたの良さを知つているし煙草を辞めさせて見せる、そしたらもつとあなたは魅力的になれるもの。あなたも誰かに思われてると知れば変る事ができる筈はずだわ」

「俺はそいつがあんたの妄想であると願いたい。魅力なんざ無くてもいい、それに変わる必要もないだろう。俺には今があればそれだけでいいのさ」

俺がそついい終わるその前に彼女は俺の頬にキスをして走り去つた。離れてゆく彼女を呆然と見つめると彼女は振り返り大きく手を振つて人の波の中に消えていった。やれやれ、物好きな事だ。求めでもないものが突然自分に訪れて来たならば誰でも戸惑うものだ。考えても仕方が無い、俺は気を落ち着けてポケットから携帯用の灰皿を取り出すと足元の煙草の吸殻を入れ、手すりに持たれて深い息を吐いた。

橋を行き交う人と車の波は今も止まる事が無い。色の本流は俺を落ち着かない気持ちにさせていた。俺の中に存在した白と黒のゴシック調の町に少しばかり彩色が加わつた、そんな気がしたが、それも悪くないかもな。そう思い煙草を啜すえては見たが、今日ばかりは何故かそれ以上煙草が吸いたくはならなかつた。

俺も少しは建設的になれただろうか、まさかな。俺は一人笑うと
啜えた煙草を折り、取り出した灰皿に押し込むと、橋をゆっくりと
後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1144g/>

断片小説

2010年10月20日18時45分発行